

# 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて —キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査(2025年)—

紺谷 亮一 ノートルダム清心女子大学文学部教授

山口 雄治 徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学域准教授

フィクリ・クラックオウル アンカラ大学言語・歴史・地理学部教授

## Investigation towards the Understanding of the Chalcolithic Period in Central Anatolia: Excavations at the Central Trench, Kültepe, Turkey (2025)

KONTANI, Ryoichi Professor, Faculty of Literature, Notre Dame Seishin University

YAMAGUCHI, Yuji Associate professor, Graduate School of Technology, Industrial and Social Sciences, Tokushima University

KULAKOĞLU, Fikri Professor, Faculty of Languages, History and Geology, Ankara University

中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査(2025年)—

### 1. はじめに

キュルテペ(Kültepe)遺跡(古代名:カニシュ)は、トルコ中央部、カイセリ市の北東約20 kmに位置する(図1左)。1925年に粘土板文書が大量に発見され、1948年以来今日まで発掘調査が行われている。これまで前期青銅器時代からローマ帝国時代までの文化層が確認されてきているが、特に中期青銅器時代のアッシリア・コロニー時代の物質文化は質・量ともに豊富で、アナトリアにおいて最も華やかな時代の一つでもある。これにより、同時代の西アジア世界における交易網について深く理解する事が可能となった。こうし

た成果から、2014年には遺跡全体がユネスコ世界遺産暫定リストに、2015年には中期青銅器時代の約25,000枚もの粘土板文書がユネスコ世界記憶遺産に登録された。

その一方で、なぜ中期青銅器時代に当該遺跡が巨大化したのか、という前期青銅器時代以前の考古学的状況についてはほとんどわかっていなかった。特に、中央アナトリアにおいては後期銅石器～前期青銅器時代の調査遺跡は限定的であり、しかも両時代を連続的に捉えた遺跡はごくわずかであった。私たちはこの問題を明らかにするために、前期青銅器時代以前における文化編年の構築を目的としてキュルテペ遺跡での発掘

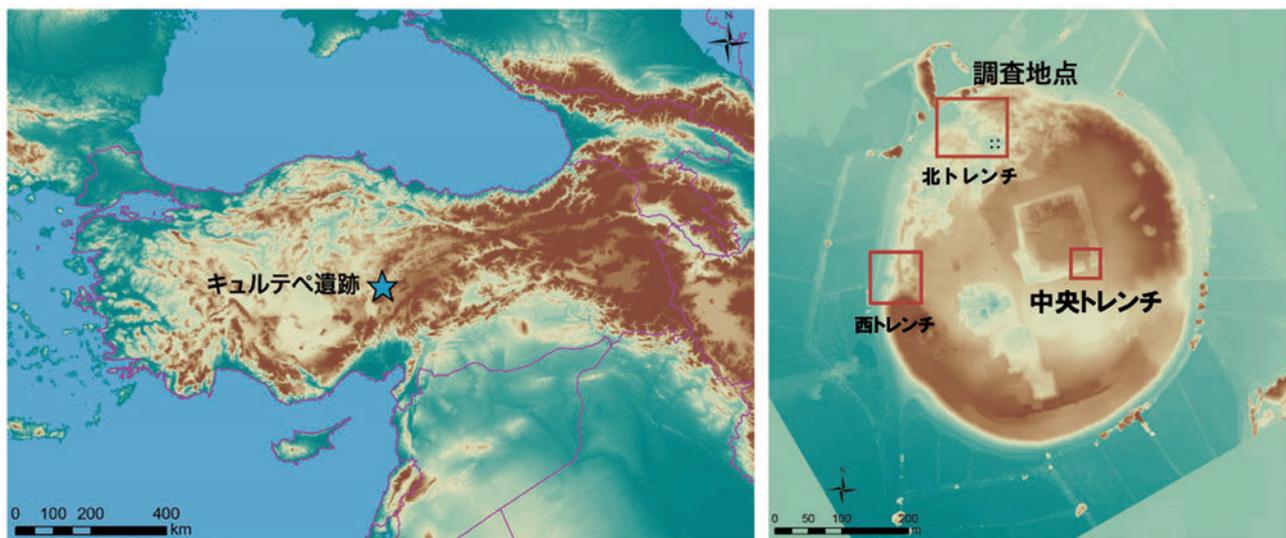


図1 キュルテペ遺跡の位置(左)と遺跡地形測量図・調査地点(右)  
(左は SRTM3 データを使用して作成、右の地形測量図は早川祐弼氏作成)。



図2 中央トレンチ遺構配置図(上が北)。

調査を2015年から開始した(図1右)。これまで北トレンチ・西トレンチで調査を行い、前期青銅器時代の物質文化の変遷を明らかにしてきた(Kulakoğlu et al. 2022)。そして2021年からは中央トレンチの調査を開始し、後期銅器時代の文化層を捉えることに成功した(Kulakoğlu et al. 2024、紺谷ほか2022・2023・2024・2025)。2025年度は、2025年8月5日～9月30日まで発掘調査を行った。目的は、中央トレンチを東側に大きく拡張し、ジグザグ建築址の東端を捉え、その規模に関するデータを得ることである。

## 2. カイセリ地域のポテンシャルとは？

この地域になぜ大規模遺跡が出現したのか、その背景に迫るため、現代のものではあるがカイセリ県における農業データを見てみると、穀物生産高はトルコ有数の穀倉地帯であるコンヤ県等と比較するとそれ程高くないことがわかる。トルコ政府が公開しているカイセリ県の2023年農牧畜データは以下のような状況となっている(<https://kayseri.tarimorman.gov.tr/>)。

品種ごとの作付面積はオオムギ・コムギが最も広く、サトウダイコン・マメ類・ジャガイモ・トウモロコシは比較的狭い。その一方で、収穫量を見るとサトウダイコンは、オオムギ・コムギの数倍、ジャガイモは1.5倍程度である。つまり、ムギ類の集約性がそれほど高くないと考えられる。ちなみに、キュルテペ遺跡が位置する場所は地理的・行政的には「ギュネシュリ平原耕作区域」に位置し、その場所はカイセリ県内では最も狭い耕作区域となっている。この点だけにして

もキュルテペ遺跡が農耕を基盤にした古代都市ではなかった事が想起される。

家畜に目を向けると、ニワトリの飼育数が最も多く、ヒツジ・ウシがそれに続くが、これらの飼育頭数はそれ程多くない。さらにカイセリ県の冬季は寒さも厳しく、降雪量もかなりある。このことからカイセリ県は農耕・牧畜とは異なる分野に活路を見出す必要がある。例えば、近年のカイセリ空港における大規模改修や機械工場、外資系大規模スーパーマーケット(内陸部であるにも関わらず魚介類販売が豊富)、ホテル誘致、複数のショッピングモール開設、エルジェズ山麓スキー場建設等が目を引く。カイセリ県が物流・経済のハブ化を狙っているのは明らかである。またカイセリ県では、中世から金細工が盛んであり、今でも独自の金マーケットを保持している。また、近現代史を通して多くの有力なトルコ人実業家を輩出している。現代と過去を安易に結びつける事はできないが、これらの事柄はなんらかの参考になるであろう。

## 3. 発掘調査の成果

2021～2024年度の発掘調査によってジグザグ建築址に伴う部屋らしきものはいくつか確認されていた。今年度は、これらの中から確実に部屋と認定でき、今年度調査対象となったものについて触れる(図2)。

**ROOM 1:** この部屋については、初年度の段階で報告している。部屋内に炉があり、南西と北東隅に入れ子状態の埋納土器が確認され、儀礼空間を想起させる非常に特徴的な部屋である。日干しレンガの壁体も高



図3 Room 3 出土埋納土器(北から)。



図4 周壁全景(南西から)。



図5 周壁表面の状況(南東から)。

い所では床面上3mまで残存している。今年度は北西隅にある出入り口を発掘した。部屋内の出入り口の角には部屋床面から上に計3個の石製ドアソケットが設けられている。内開きの構造で、床面は少なくとも3時期にわたって張り替えられている事になる。また、出入り口はコリドールに面している。

**ROOM 2:** 当部屋は、ジグザグ建築址に伴う最も広い部屋となっている。北東部分は未発掘であるが、おおよそ正方形のプランを呈する。ROOM 1 同様に複数の床面が確認されている。深い場所では日干しレンガ壁が3mの高さまで残存している。部屋の東側では壁に埋納された甕が発見された。同様の事例は2023年度の発掘で当該部屋南側壁でも見られた。

**ROOM 3:** 2023年度の時点で発掘されたが、今回床面をさらに精査したところ、部屋内南西隅で赤色磨研大型壺が確認された(図3)。壺の上部には蓋をするような状態で長方形の礫が置かれていた。土器の覆土からは、遺物は発見されなかった。2022年度の発掘において、当該壺のすぐ隣から黒色磨研と類似した壺が見つかった。この壺には内部に拳大の礫が数個詰められていた。つまり、この部屋では2つの大形壺が床面下に埋納されていた事になる。ROOM 1 同様、儀礼的要素を醸し出す状況である。

当該発掘区では、部屋内と壁体内の2種類の埋納土器の出土例がある。埋納地点以外の相違点として、壁体の埋納土器では入れ子状態のものは見つかっていない。

**ジグザグ建築址東側周壁? 遺構:** 今年度、最も興味深い発見は周壁である。昨年度の段階でジグザグ建築址東側南東隅において土塁のような遺構が見つかった(紺谷ほか2025)。この遺構の性格を明らかにするために、発掘区を東側に約10m拡張した。まず、北東にのびる日干しレンガと石列が組み合わさった壁体

が確認された(図4)。その長さは10m以上で、発掘区東側を囲む状況である(図2参照)。この壁体の東側は、急激に落ち込む斜面で、その斜度は約25度を測る。壁体と現状の底面との比高差は約3mであり、まだ最深部には到達していない。壁体表面は堅く締まっており(図5)、断面をみると異なる粘土を版築状に突き固めていることや、複数枚の硬化面を伴っていることもわかった。

築造年代については、後期銅石器時代もしくは前期青銅器時代I期の可能性が考えられる。その理由としては、周壁内覆土から中央アナトリア特有の彩文土器が出土した点が挙げられる。現地考古学者の間でもこの土器の年代については意見が分かれるが、現状では当該時期が妥当とされている。また、ジグザグ建築址と周壁の切り合い関係から、周壁の方が時期的に僅かであるが新しい可能性がある。

当遺構の性格については現段階では不明で、周壁・城壁・基壇いずれの用語が適しているかは今後の調査に委ねなければならない。つまり現時点では、当該遺構が軍事的な防御機能、神殿のような信仰機能、宮殿のような権力機能のいずれに関わるものかどうかは不明とせざるを得ない。当該遺構エリア北側には、後の時代に属する前期青銅器時代II期および中期青銅器

時代前半の円形遺構が存在する。建築レベルに違いはあるものの、当該周壁とそれらの形状や方向が一致していることからすると、当エリアでは継続的に円形の大規模建造物が形成されていた可能性が考えられる。そして最終的には中期青銅器時代後半期にワルシャマ宮殿(Warşama Sarayı)として、一辺約100mの矩形の大建造物によってエリア全体が占有されることとなる。すなわち、この周壁はジグザグ建築址が存在する径約100mのテル状の高台を囲んでいる可能性が高い。そのように考えると当該建築址の性格は、当時のエリート層に関わる公共建築物である可能性が一段と高くなってきた。少なくとも中央アナトリアではこのような周壁は見られない。

#### 4. まとめ

私たちがカイセリ県内の遺跡分布調査をした際、銅石器時代に属する遺跡は非常に数も少なく(18か所)、その規模も小さかった(Kontani et al. 2014)。つまり、キュルテベ遺跡における当該遺構の発見は、このようなカイセリ地域における銅石器時代の考古学的状況とは著しく異なるものと認識しなければならない。遺跡規模等からして、キュルテベ遺跡が突出しているのである。近年におけるカイセリ地域での緊急発掘調査においても、銅石器時代遺跡の遺構は小集落レベルを超えていない事がわかる(Girginer & Girginer 2025)。「都市と後背地」理論を考えるにしても、現況では後背地の存在があまりにも貧弱であることはすでに述べた通りである。すなわち、「小集落が中心地であるキュルテベ遺跡に結集して都市化する」というプロセスは、現段階では成り立ちにくいものと考えられる。私たちは、新たなる都市論を創造する段階に来ている事をひしひしと感じる。

本研究は、JSPS 科研費 JP24K04360、JP24H00098 の助成を受けたものである。

#### ■参考文献

- ・ Kontani, R., H. Sudo, Y. Yamaguchi, Y. S. Hayakawa and T. Oda-ka 2014 An Archaeological Survey in the Vicinity of Kültepe, Kayseri Province, Turkey. In L. Atici, F. Kulakoğlu, G. Barjamovic and A. Fairbairn (eds.), *Current Research at Kültepe-Kanesh: An Interdisciplinary and Integrative Approach to Trade Networks, Internationalism, and Identity*, 95-106. Atlanta, Lockwood Press.
- ・ Kulakoğlu, F., R. Kontani, A. Uesugi, Y. Yamaguchi, K. Shimogama and M. Semmoto 2020 Preliminary Report of Excavations in the Northern Sector of Kültepe 2015-2017. *Subartu* 45: 9-88.
- ・ Kulakoğlu, F., R. Kontani and Y. Yamaguchi 2024 Discovering the Late Chalcolithic Period at Kültepe: Excavation of the Central Trench (2021-2022). *Subartu* 51: 179-184.
- ・ Girginer, Ö. O and K. S. Girginer 2025 A New Contribution to Anatolian Ancient Mining Activities: A Miners Settlement from the Early Bronze Age I, Bileç Höyük (Develi/Kayseri) Salvage Excavation. *ADARYA* 28: 465-491.
- ・ 紺谷亮一 2020「趣旨説明：アナトリアにおけるメガシティの起源」『日本西アジア考古学会第25回大会要旨集』日本西アジア考古学会 9-10 頁([http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2020/10/25thJSWAA\\_abstracts.pdf](http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2020/10/25thJSWAA_abstracts.pdf))
- ・ 紺谷亮一・F.クラックオウル 2022「キュルテベ遺跡の都市性とその評価」『西アジア考古学』23号 137-144 頁。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2022「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテベ遺跡北トレンチ発掘調査2021年—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』97-99 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2023「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテベ遺跡北トレンチ発掘調査2022年—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』22-25 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2024「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテベ遺跡北トレンチ発掘調査2023年—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』26-29 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2025「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテベ遺跡北トレンチ発掘調査2024年—」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』22-25 頁 日本西アジア考古学会。